

大阪大学 浦田悠

コロナ禍の学習環境

る。

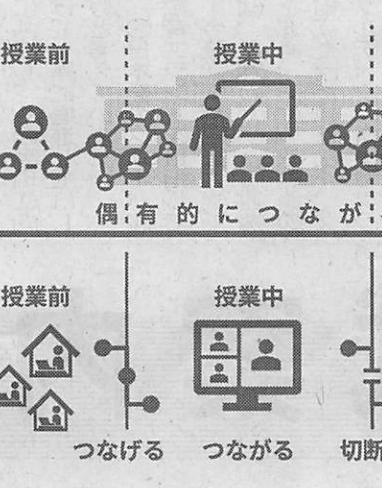
大学関係者は、昨年度以来のCOVID-19の流行によって、大学のキャンパスから学生も教職員もほぼ消えるという未曾有の経験をした。最初の緊急事態宣言が発出された際には、キャンパス内の学習スペースは無人となり、代わりに顔や名前がタイトルに並んだWeb会議システムのリームがバーチャルな学習スペースとなったのである。その経験によって、はからずも、大学のキャンパスという場所や、そこで自然に展開されていた教育、およびそれ以外の活動を含めた営みの意味が根本的に問い直されることとなった。その後、感染状況に振り回されながら、学習環境を何とか維持し、アップデートしようとするべく、対面とオンライン、同期と非同期を組み合わせた多様な授業形態が見られるようになり、現在に至っている。

筆者が所属する大阪大学では、コロナ禍が始まった当初から、学内の「COVID-19に関わる新学期授業支援対策チーム」が結成され、筆者もその一員として、オンライン授業やハイフレックの授業の支援や情報提供に関わってきた。ここでは、その経験も踏まえつつ、2回にわたってコロナ禍における学習環境の現状と課題、および可能性について考えたい。

1. オンライン学習環境の特徴

この1年半の間に、「Zoom疲れ（Zoom fatigue）」という言葉が流行し、授業を耳にしたことがある方も多いだろう。各大学で緊急で実施されたオンライン授業についてのアンケートでも、Web会議システム上での授業において、対面授業とは異なる疲労感が蓄積しているという声は、どこの大々でも聞かれた。Zoom

も疲れがなぜ起るのかについては、これまでのバーチャル・コミュニケーションに関する研究をもとに、いくつかの要因が指摘されている。主な要因としては、映像と音声のわずかな遅延があること、非言語的な手がかりが欠損していること、視線がずれていること、参加者の顔を見続けることによる生理的覚醒が生じること等が挙げ



コロナ禍の学習環境

その現状と課題、および可能性

〈上〉

ま疲れがなぜ起るのかについては、これまでのバーチャル・コミュニケーションに関する研究をもとに、いくつかの要因が指摘されている。主な要因としては、映像と音声のわずかな遅延があること、非言語的な手がかりが欠損していること、視線がずれていること、参加者の顔を見続けることによる生理的覚醒が生じること等が挙げ

られており、これらがオンラインでのコミュニケーションを行う上で、対面とは異なる認知的負荷をかけているのではないかと推測されている。このような技術的な課題については、すでに様々なソリューションが提案されており、対面でのコミュニケーションの自然さや遠近感などを再現しようとすアプリケー

SNS等々に気を取られる傾向があり、またマルチタスクと学習成績とは負の関連があるということが指摘されている。教員側は、このようなオンライン学習におけるデバイスの特徴を認識し、集中力を持続させるような授業・教材設計を心がける必要がある。L.B.Nielsen, A. Goodson による『Online Teaching at

活用する、④読む、聞くだけでなく、話す、書く、考える等の活動を積極的に取り入れる、⑤即時に的確なフィードバックをする、⑥資料を紙に印刷して読む機会も提供する、等の工夫はオンライン学習において特に重要なことになるだろう。また、ある研究によれば、学生側でも学習目的と非学習目的で意識的にアプリケー

その意味でも、授業の境界を越えたつながり